

# 大隅の古墳群の歴史的重要性 岡崎18号墳発掘調査から

上野原縄文の森(国分市)で開催中の企画展「命と祈りの考古学」では、大隅半島の古墳について「コーナーを割いている。地域の視点で古墳時代を見直す動きが全国で進む中、横瀬古墳(大崎)、唐仁古墳群(東串良)、塚崎

鹿兒島大学総合研究博物館助教授 橋本 達也



はしもと・たつや氏 1996年、早稲田大学大学院文学研究科考古学専攻修士。徳島大学助手を経て2001年から現職。

かつての日本に前方後円墳という巨大な墓を造った時代があったことや、大阪府にある仁徳天皇陵とよばれる世界的にも巨大な古墳の存在を知っている人は多いだろう。では、鹿兒島に

## 広域交流の結節点

も巨大な前方後円墳があるといったらどうであろうか。鹿兒島県は前方後円墳などの大型古墳が造られた最南端の地域なのである。その中心地域は大隅の肝属平

## 地域の独自性 研究が急務



岡崎18号墳墳丘(上部)と地下式横穴墓  
—2003年9月、串良町(橋本助教授提供)

に墓室を掘り込んで地下に空間を造る南九州に独自の墓制である。五世紀前半の地下式横穴墓は大隅では最大であり、また最大規模であった。

品が出土した。鉄錠は鉄の延べ板で、鉄素材として流通したものである。これももつこと自体が富の象徴とみられるものだ。またU字形鉄錠先は五世紀前半に出現する耕作用である。鉄錠は朝鮮半島製、U字形鉄錠先もその可能性が高いもの

だ。また、奄美以南が採取地のイモガイで作った貝輪も出土した。岡崎18号墳では朝鮮半島から南島そして瀬戸内とさまざまな地域との交流を示す多彩な文物が出土した。すなわち、これらの資料は古墳時代の九州が日本列島各地から朝鮮半島・琉球列島につながる人・モノ・情報の結節点であったことを物語っているのである。また、古墳と地下式横穴墓の同時存在は、なぜ古墳にはいる人とそうでない人がいたのか、つまり古墳時代の本質である、なぜ古墳は造られたのかという問題に迫りうる重要な鍵を握っている。同時に出現期の地下式横穴墓の確認によって、南九州の独自性はどのようにに発現したのかといった問題を追求しうる可能性が出てきた。これらの視点は今後、歴史研究の中で新しい時代像を描きうるテーマであることは間違いない。この地域

の古墳の実体をつかむことは、日本列島に古代国家が誕生するに至る過程や隼人問題などを含む日本民族の形成過程を明らかにすることにつながるものである。以前は研究者も古墳は近畿の大型古墳がこの時代を代表するという意識が強く、各地域の古墳は近畿の大型古墳との比較によって評価されてきた。しかし、古墳は全国にあるのだ。広範な地域になぜ古墳は出現し、地域内ではどのような意味があったのか。地域の側から古墳時代を見直し、新たな歴史を構築しようという動きは近年とくに重要な課題になりつつある。古墳が築造された南の境界地域である鹿兒島は単なる地方や辺境などではない。時代の本質を最も端的に表しているのは、まさに境界地域の方なのである。この地域の研究はまだ緒に就いたばかりだ。まだまだ明らかにすべき課題は多く、地中に眠っている。